

しおさい

症 例 概 要 利用者氏名：N.T様（90代 男性 要介護5）
病名：左大腿骨頸部骨折術後
利用サービス：長期入所
経過：H29年7月に転倒し左大腿骨頸部骨折の診断にて手術され
その後リハビリ目的で入所となる。

内 容

H29年12月下旬より、しおさいへ入所。入所時は声掛けに対する反応も良く、笑顔も多くみられADLとしては車椅子への移乗は見守りで可能。食事動作はセッティングのみで自立、排泄は尿意・便意なくオムツへ失禁でした。夜間になると認知症のBPSDが見られ、大きな声を出したり、自己にてベッドから車椅子に移乗しようとして転倒・転落の危険がありました。H30年1月、左足背の表皮剥離の悪化より、壊死性筋膜炎となり、この頃より徐々にADLの低下や食事むせ始め、1月中旬には誤嚥性肺炎で入院となってしまいました。入院加療後の3月に再入所されましたが、再入所の際にはADL全介助で、活気もなく、声掛けにも反応乏しくなっていました。そんな姿を見たご家族は、『せめて食事だけでも自分で食べられるようになって欲しい』、『食べているところを見たい』とおっしゃっておりました。そこで、私たちは、一口でもご本人で食べて頂けるように声掛けを試みましたが、ご本人は指示動作も入らず、両手を組み見つめているだけでした。リハビリでは上肢のROMエクササイズを中心に行い、介護リハでも筋力低下・拘縮予防に努めていきました。また、ご本人の発語が少なくても声掛けを繰り返し、少しずつではありますが会話も増えていきました。

その頃から、食事やオヤツの時間にスプーンをお渡しすると、数口だけでも食べられるようになっていきました。ご自身で食べることについてはご家族は再入所前のICで、今後も同様の事が起きる可能性も高く、年齢的にも厳しいので覚悟をしてくださいと言われ悩んでもおられましたが、やはり、ただ日々を過ごすのではなく、食べるのが好きだったおじいさんに、自分で食べて美味しいと感じてもらいたいとのご希望だったのでご家族とも充分話し合い、リスクもありましたがトライしていくことにしました。

私たちも時間を要してもご本人に食べて貰うように促し、諦めずに継続してきたことで、今では全くご自身で食べようとしなかったN.Tさんが、介助しなくても食べられることが多くなりました。やはり、ご自分で食べる食事は美味しいと笑顔も増え、食事セッティングすると声掛けをしなくても自ら食べ始めることもあります。他施設にご入所されている奥様は、ご面会に来た際に「おじいさんの笑った顔が見れて嬉しい」と泣いて喜ばれておりました。

当たり前のようなことですが、ご本人・ご家族のご希望に沿って、根気よくケアを続けることで、一度は失くした笑顔も取り戻せて、私たちにも喜びを与えていただけた症例となります。